

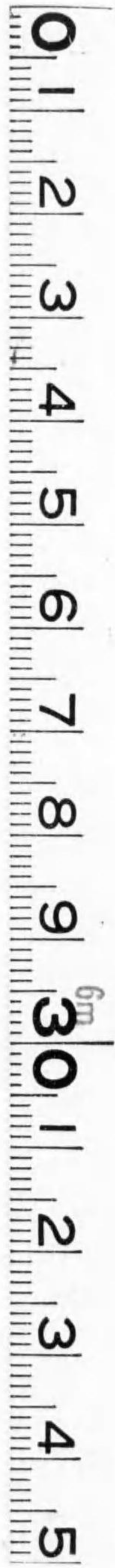


550

63

女神七柱

中団 信子 著



始



賦性女布



七女
柱神

正
中 國 舊 子 苑
東 寄 贈
紅 玉 堂 版

寄贈本

序

詩

裝幀
河野
通勢

愛せよ戀せよ天に輝け（序詩の一）



「愛せよ戀せよ、天に輝け—」

姉妹よ、このうたを海遠き西の國、

さる詩人のうたとのみ思つたら、

それはたいへんな間違ひだ。

おのころ島八尋殿の、

天の御柱めぐりめぐりて、

あなたにやしえをとことのらせたる、

我等の女神のうたをきかうぞ。

八雲立つ須賀の宮居のよき姫よ、
 稻葉の姫よ、また須勢理姫、
 八俣の大蛇、鏑矢、氷目矢、
 なほ朗々とうたへる歌のいかめしさ。

下照比賣の哭かせる聲は天かけり、
 豊玉毘賣のうたへる歌は水かける、
 あゝ女神、我等が愛の女神のうたぞ、

550-63

550-63

「愛せよ、戀せよ、天に輝け！」

エロースの矢よ、ヘラの孔雀よ、
 そはかゝはりもない遠の國、
 姉妹よ、仰げ天空の燦たるひかり、
 それこそ我等が愛の女神。

ああ、悲戀もよし哀戀もよし、
 石となりたる佐用媛よ、
 鬼となりたる橋姫よ、

4

蛇となりたる清姫よ。

また焚殺刑のお七のうたも、

狂亂戀のお夏のうたも、

すべてが我等にうたひかける、

『愛せよ、戀せよ、天にかゞやけ』と、

うましき臥床の金欄の、

襖屏風の奥深く、

香をたく夜の寶萊は、

5

あまりに高きみやびうたか。

さらば祭の夜のさんざめきに、

砧、機織り、田草とり、

風にあはせてうたはうぞ、

『愛せよ、戀せよ、天にかゞやけ。』

姉妹よ、姉妹よ。

さうだほんとにこゝろから、

我等も愛さうよき人をとこ、

6 戀して天に輝かう。

愛する事の光榮よ、
戀することの喜びよ、
仰げ天空に輝く女神、
我等が胸に赤き血は燃ゆ。

生めよふえよ地に充てよ（序詩の二）

『生めよふえよ地に盈満よ！』
愛する日本の姉妹たち、
この貴い神宣を、
バビロンの神の垂教とのみ思つたら、
それは大變なまちがひだ。

7 淤能碁呂の島根かたく、
八尋殿見たてまつりて、

天の御柱、めぐりめぐりて契りたる我等の母神、
その國生みの、その神生みの、
貴き教、君よおろがめ。

さてはまた、黄泉比良坂、

千引岩引塞へて、

千五百の産屋たてんと宣りし我等の父神、
その國生みの、その神生みの、
かしこき教、君よ拜せよ。

阿波岐原禊祓ひ、

天安河、氣吹の狭霧、

あゝ我等の遠き父なる神、母なる神は、

いと嚴かにも宣りたまふ、

「汝等生めよ、ふえよ、地にみてよ」と。

仰ぎ見よ、あゝ光榮ある日本の天、

俯して撫せ、あゝ温愛あふるる日本の地、

三千年の耀光は、

生み、ふえ、さかえ、地に満ちて、

いまこそ世界の隅までも照してゐる。

汚れのこゝろ、衣すてて、
河瀬におりて身をすゞぎ、
くもれる瞳、にこれる鼻、
洗ひきよめて、我等嚴かに誦じやう、
『うめよ、ふえよ、地にみてよ』と。

目次

女神七柱

1

伊邪那美命	三
天照大御神	五
櫛名田比賣	九
須世理毘賣	二

八上比賣.....二四

下照比賣.....一八

豐玉毘賣.....二二

萬葉聞秀

笠女郎.....二七

田村家大嬢.....三〇

大伴坂上郎女.....三三

舍人娘子.....三四

坂上家大嬢.....三六

石川郎女.....三九

園臣生羽女.....四一

巨勢郎女.....四三

大神郎女.....四五

常陸娘女.....四七

才女七人

- 紫式部……………五
- 紅梅内侍……………五
- 清少納言……………七
- 小野小町七題……………六
- 一、雨乞ひ小町
- 二、草紙洗ひ小町

- 三、通ひ小町
- 四、關守小町
- 五、鸚鵡小町
- 六、卒塔婆小町
- 七、清水小町
- 阿佛尼……………八
- 常磐井局……………八

税所敦子.....六七

哀戀頌

小督局.....九三

横笛.....一〇三

祇王.....一六

佛御前.....一三〇

勾當内侍.....一三五

烈婦唱

建禮門院.....一三八

時忠が女.....一三一

小宰相局.....一三四

靜御前.....一三七

源乙姫.....一四〇

重保が妻.....一四三

慈母讚

政	一休が母	楠滋子	松下禪尼	常磐御前	鬮體の尼
岡
一六	一三	一八	一六	一三	一七

乃木靜子	北條政子	巴御前	微妙	袈裟御前	玉蟲前	二位禪尼
.....
一六	一三	一六	一七	一四	一五	一四

嬌爛戀

傳通院……………一九

佐用媛……………二〇五

お夏……………二〇八

お七……………二一一

清姫……………二一四

深雪……………二一七

おお里……………二二〇

お駒……………二二三

初花……………二二六

おみつ……………二三九

櫻兒……………二四一

菟原處女……………二四三

真間手古奈……………二四四

女神七柱

詩集の後に……………三七

伊邪那美命

八鹽^{つゝ}累積^り、つもり、成るといふ淤能碁呂島の、
その涼^あろな土^ちに天^あ降りたる命^{めい}なれば、
ひとしほ純^{つや}ふかき情思^{こころ}をもたれてゐたでせう。

海月のごと漂^たふ四圍^{しゐ}も修理^{つくろ}固^かめられて、
天^あの御柱^{みはしら}、いよよ大^{おほ}いなるひかりのもと、
伊邪那岐命^{いせなきたみ}にさきたちて詔^{みこと}りし伊邪那美命^{いせなみ}よ。

法りも、罰りも、

うたがひも、猜みもつゆしらぬ、

清あ明かき焰かのけだかさで目め合あせし戀この命いのちよ。

美あは哉に好よし少え男をとこ、美あは哉に好よし少え男をとこ、

たとへ太ふ占たの卜ひにとがめられ水み蛭づ子こらむとも、

あゝなんと生なまの薰かほたかい眞ま實じつさでせう。

遠とほき戀この母ははを私わたしたちは愛あいさう。

その純まことなる情こころ思しを、

澱いみないあつつい靈たま氣きのほとばしりを。

天照大御神

素肌、三昧、

血がたぎるまで 麥をあふれば、
黒髪 尺に長けゆらぐぞ。

目を刮して見よ、

一切時、一切處、周ねく輝きて
愛に薰ずるもの。

空に天照大御神 地に人妻、
聖き創造の埧塙を、身をもつてなす、
弛みなきこの深紅の呼吸を聽け。

古りて彌美しく、

澄みて彌濃く炎る、
久遠の女性、空の天照大御神よ、

オシリスの徳は知らず、

ヂュピター、オーチンの名は知らねど、

ほがらかに心華さく私自らの力よ。

あゝ快きめざめに、

乳戀ふ吾子も 手まさぐりて、

香りみつ日の彩をつかまむとするぞ。

ありがたや 有情のみかみと、

ともに息する若き母のふところ、

吾子よ 晴々とすこやかに肥れよ。

櫛名田比賣

まがつみの八俣遠呂智も影をたち、

須賀の宮 心晴れ、こゝろ爽れ、

八雲たつ八重垣かたくちかひたる、

肥河の緋よりも赤きその愛よ。

湯津爪櫛とるたびに、

若き心によみがえり來る、

櫛名田姫のうるはしの姿、

まぐはひの日のうましきうた。

歌人は昨日もうたひ今日もかたる、

八重垣の潰ゆる日なく、

愛の八雲空にたかく、

若き女等、今日もたゝえ明日もうたふ。

須世理毘賣

無垢な力が額にかがやく、

須世理毘賣のくる髪よ、

それこそは生ける桂樹の飾り。

蛇室に蜈蚣の室に、峰の巢に、

大穴牟遅の命を守りいだきしめた、

たぐひなき愛の情思。

試練の刃に、迫害の焰に、
つひに克ちたる毘賣の青春よ、
偉いなる献身よ。

宇迦能山 嶺たかく巖かたく、
宮柱太しり、氷木たかしりて、
築きあげたる戀の殿堂を仰げ。

蘭麝にまさる芳薫は、
みよ、なごみなごみて、

海島の隅々までもみちわたる。

八上比賣

彌に古りたる松柏の、
 いよよ目出度き命のさかえ、
 思へばくちをしき、
 八上比賣が戀の破局よ。

八十神のたけき威も、つめる實も、
 あくたのごと、さけ斥けて、
 たゞ一筋にまことの愛に、

心もやした姫であつた。

命にかけてしたひ戀ふる、
 大穴遅命の上、
 ふりかゝるまがことを、
 我ゆえところそ哭き悲しんだ姫であつた。

八十神の呪ひの焰、怒の氷目矢、
 漏のがれて去にたる命の、
 つゝがなき幸をひたぶるに、

身細るまで祈つた姫であつた。

あゝされど、根の堅洲國遠く、
はしき命、求ぎゆきし日、
御嫡妻、命守りたれば、
愛するが故、畏み去つた姫よ。

松柏はいやに古りて、
いよよ天稟の香をたくに、
あはれ人の世の戀のみは、

などてかくばかり悲しきぞ。

下照比賣

―天の還矢、天若日子が、胡床に寝たる
高胸坂に中りて死せき。故天若日子の妻
下照比賣の哭せる聲、風の與響きて天に
到りき。
―古事記―

天照る神のお詔にさかりし罪は罪、

わが夫の還り矢にみまかり行けるは、

さても、きびしき法よ。定よ。

かなしみの泪、瀧とながれて、

ものみなを潰しながし、

我が身をもわだつみの底に奪ひゆけよ。

かく矢よ、はゝ矢よ、還矢よ、

我がまろらなる胸をもつらぬけ、

ひとり永らへん世はかなし。

一夜の契りもちぎり、八年のまぐはひ、

あゝ今、われに夫はなし、

悲しみよ。息絶ゆるまでもわれは泣かん。

天照る神のみり、
たがへることはかしくけれど、
夫は夫とて、あゝさても呪はしき死よ。戀よ。

豊玉毘賣

—戀しきに得忍へたまはずて、その御子
を治養しまつる縁に因りて、そのいろこ
玉依毘賣につけて、歌をなもたてまつり
ける
—古事記—

白玉のよそひ貴き比古遅の命よ、
神さり來つれど日毎夜毎に、
わすれがたきはみましがまこと、
あはれ残し來たる吾子は、
すこやかに生ひたちゆくか。

香木の枝はしげり、
 玉井の水はすめれど、
 海驢の皮疊七重にしき、
 絶疊八重にしけども、
 あゝ今は、われに柔らかき手枕もなし。

赤海鯨魚の鱗ひかり

思ひ出は遠くかえり行けど
 一尋鰐右に左に泳ぎゆけど、
 いまは再び逢ふよしもなく、

たゞなみだ、なみだのみわだつみに満つ。

比古遅の命よ、

赤玉は緒さへ光りて生いたちゆくか、
 ふくらみふくらむ乳房をだいて、
 わが思ひ、ひたすらにひたすらに、
 鶉羽のふしどを思ひて泣くよ。

世のことごとくに忘れじの君がことば、
 くりかへし、くりかへしわれは祈る、

はしき比古遅の命よ、
はしきわが子よ、
すこやかに、すこやかにこそなませ。

萬葉 閨秀

萬葉が歌集に多くの閨秀あり。そが中の作歌を小曲風の詩にさ試みたり。原歌を冒瀆する事の多きを恐る。

笠女郎

大伴家持に贈れる歌『想思はぬ人を思ふ
は大寺の餓鬼のしりへに額づくことし』

— 卷四 —

御堂にならぶ金佛は、
おろがみ戀へど術もなし、
ましてつれなき、
餓鬼への祈り。

こがるれと思へど君は、

いらへさへなく、
 狂ほしきかな、
 小松が下に今日もいねすなく。

阿難を戀へる旃陀羅の、

むすめは幸ある生れかな、

あゝ猛火の部屋に、

呪願する母もわれにはなし。

思ふにし、

死にするものにあらませば、
 百千遍死にかへり、
 ひたすらに君をぞ戀はん。

田村家大嬢

『ふるさとの奈良思の丘のほととぎす言告
げやりしいかに告げきや』——卷八——

ことづてんすべも悲しく、

ほととぎす、

血になくおもひなくと言へば、

わがおもひ、

告げよとやれど空だのみ。

時鳥、鳥にしあれば、

わがねがひ、

いかに告げきや、

おもひわび、

涙のかはく間なく淋しき。

大伴坂上郎女

男をうらみ歌に『はじめより長くいひつゝ
、待めずばかゝる思ひに逢はましものか』
— 卷四 —

なまなかに、

拾はれしこと、いまは悲し、

拾はれざりせば、

捨てらる事もなかりしものを。

捨てられて、

磯の小貝のからきなみだ、

龍宮の夢さめて、

いまさらにうらめしき君かな。

舍人娘子

皇子の『丈夫や片戀せんと嘆けども、し
この丈夫なほ戀ひにけり』に和へたる歌
『歎きつゝ、丈夫の戀ふれこそ吾が髮結の
漬ちて濡れけれ』
——卷二——

蛋白石の弛みなく輝く、

あゝ古くして靜なるその炎。

珠つけるならば蛋白石こそよけれ、
戀するならば君の一途こそよけれ。

まことみめかたち鮮かなりと、

その内心光なくばいかにすべき。

つはものの苦惱に心ひらきて、

なほ戀ふるならあなたふと。

そのなみだわが元結漬ちて、
君が愛にこそぬれかほらむ。

坂上家大嬢

大伴家持に贈れる『玉ならば手にも纏が
むなうつせみの、世の人なれば手にまき
がたし』
——卷四——

わが腕に玉はまかれて、

光れども、

悲しきは手まぐらの、

主もなし。

ひとりねののべたる腕に、

君がうなじ、

玉とまき得ば夜もひるも、

たのしきものを。

うつそみの世はかなし、

はなれゐて、

見まく思へど、

見もかたし。

わが腕に玉は輝け、

わが腕に、
君がうなじの香もなくて、
あはれさびしや。

石川郎女

久米禪師の「水薦かる信濃の眞弓香が
引かば良人さびて否と言はむかも」に
報へて「あづさ弓引かばまにまに依ら
めども後のこゝろを知りがてぬかも」

— 卷二 —

もろ人その手に桃弧をひけば、
四方津國の鬼も去るらむ、
君が心の梓弓、
引かばひけ、我寄り行かん。

されど、高天原とはに、
清しき御光の絶えねど、
世の戀のたよりなければ、
捨てられて道の礫とならばかなし。

まこと弦ひく後の日の心に、
はげしき魔のとぶとも、
愛の力、克つと誓はゞ、
射られて寄らん、われは。

園臣生羽女

三方沙彌の「束けばぬれ束かれば長き
妹が髪、このごろ見ぬに搔かけつらむ
か」に和へて「人みなは今は長みさ束
けさいへゞ君が見し髪亂りたりさも」

— 卷二 —

黒髪のいまは亂れ亂れて、
梳らんとは思へども、
人もまたけすれといへど、

君と相見し日の髪の、

亂れしまゝに、
かゝすて君をしのぶ我ども。

巨勢娘女

大伴安磨の「玉かづら實らぬ樹にはち
はやぶる神ぞ著くちふならぬ樹ごさに」
に報へて「玉かづら花のみさきてなら
ざるは、誰が戀ならも吾は戀ひ思ふを」
—— 卷二 ——

花咲く草木のみのらざるは、
花咲かぬ草木よりなほいたましきかな、
戀すれど片戀のつれなさは、
戀しらぬ心よりなほ呪はしきかな。

あゝ玉かづら、花の山吹、
さきさかりてもならざるは、
誰が戀ならも、わがこゝろ、
花より赤く咲き戀ふといふに。

大神郎女

大伴家持に贈れる「さよなかに友よぶ
千鳥もの思ふさわび居る時になきつゝ
もさな」
—— 卷四 ——

ひとりねの夜のふけて、
ひたすらに君のこひし、
ねむられず、ねむられず、
枕ににじむあつきなみだ。

友よび夜をなく濱千鳥、

うらやましきは鳥の身の、
よべば呼ぶとて寄りくるを、
叫べど君はいらへもなし。

呼べ、さけべ、磯の千鳥、
君が枕邊、近くなきて、
おもひわび、戀ひわびて、
苦しむ心、君に告げてよ。

常陸娘女

藤原宇合太夫が召されて京に上る時におくれる一庭に立ち麻を刈り干し布き慕ぶ東女を忘れたまふなり——卷四——

君行かば何時か逢ふべき。

春さらば いつまた咲かん。

麻刈りて我はなきなかん。

麻干して君をしのばん。

麻布しきてまほろしとねん。

いざさらばなわすれそ我を。

はしき君よわかればつらし。

才女七人

紫式部

空蟬よ、葵の上よ、藤壺よ、さて朧月夜よ、
數あまたなる戀の女性の、
愛憐情思の、
ゆたかにつややかなる舞踊よ。密語よ。

人間本然の性態と、
脉々たる靈血と、
あゝ平安華榮の舞臺に、

百彩の夢は羽ばたき狂った。

才媛紫の彩管に忍び入つて、
跳舞躍動したものよ、

そは戀の妖精か、

さてはまた戀の怨靈か。

人間輪廻の妙法よ、

蛇はうらみ 鳩はいつくしみ、

人生内奥の秘法よ、

情思は反撥し怨恨は狂ひわめく。

あゝ無窮に生くる物語源氏は、

この天地の偉なる輝きの黙示録、

若き人の胸にかゝぐる

神秘なる戀の呪符か。

紅梅内侍

ことりさへ、
かよひなるれば、
おんあいの、
なさけはふかし。
こうばいの、
うえうつさるは
つゆさらに、

ころおしまね。
うぐひすの、
またくるはるを、
やどまぎて、
まよはどかなし。
ちよくなればいともかしこし うぐひすの
やどはととはいかにこたへん。

かきつけし、
 いろたんざくの、
 うるはしき、
 みそひともじよ。

あゝはしき、
 ないしがこゝろ、
 とはにこそ、
 うたひたゝへん。

清少納言

香爐峯の雪に御簾を掲げた、
 清少納言の才能よ、
 だが、それは、
 彼女をたゞふるにはあまりにも小さすぎる。

悠久よ、昏迷よ、黎明よ、
 それ等自然と人生との交響樂に、
 心行くまで身をしたした彼女は、

どんなに愉悅を感じてゐたことだらう。

彼女の炯眼は凡ゆるものを透視した、
彼女の靈血は眞實すべてに融合した、
あゝそうして彼女の叡智は、
天地幽寂の境をも馳翔した。

讒にあつて追はれた淋しい庵、
蔑むものを去らせたる才能よ、
しかし、それさへも、

彼女の才の僅かなる片鱗のひらめきであつた。

友よ、彼女の枕草紙の、
深遠なる聖章を靜に誦じやう、
愛憐は輝き 神秘は薫じ、
さても無窮の靈峰が我等を射るではないか。

小野小町 (七題)

一、雨乞ひの小町

めぐる百官のうたがひの瞳よ、
 わけて大伴黒主くろぬしの蛇の眼よ、
 野に生れし賤の女へ、
 嘲りはいばらのごととがりとがるを。

遍空界の眞流よ、
 盡利海の聖衆よ、

玉皇上帝八大龍王、
 主風主雨の神々よ。

雲法壇上ののちの祈念、
 鳳毛の筆やをらとれば、
 くしやすざましの光かさなり、
 雷雨沛々として地にくだる。

あゝ神泉苑の池水よみがへり、
 花燈なまめきて唇をうるほし、

山野さはやかに光りたちて、
ものみなは喜びおどるよ。

紫糸の車、いまぞ牽け、

から衣檜扇もかろく身もすゞろ、

いざさらばあまつちのくまぐくに、

歌の力、かしくみてほめぞたゝえん。

二、草紙洗ひ小町

こがねのはんそうには美しき水……………

淑やかなる思考の

究むところ、

白々と薫り深む水の色、

綸言に許されし鹽に

草紙浮べて

みじろきもさやかに進む女人。

こがねのはんそうには麗しき水……………

魂こめたる祈りもて、

大伴黒主の讒をすゝぐ、
指に艶やか紅にほふ女人、
おお、小町よ、歌もやさしくくりかへす、
「蒔かなくに何を種とて浮草の
波のうねうね生いしげるらむ」

三、通ひ小町 (小詩劇) 一幕

舞臺 秋野が原

すゝき、女郎花、萩、北風と小町

〔すゝき〕

水音がしみる。水音がしみる。

遍路も菅笠にいましめられたまふ、
落日を背に急つてしまふよ。

繊維がのびる、風に吹かれて横さまに伸びる、
私も根からひやびやと、
落日を背に泪ぐんでしまふ。

〔女郎花〕

毒もつ丸が飛んで来ないものか、
夜があけても日がくれても、
すりへらされた肌の抱擁は嫌だ、

赤いくるめきが、

あゝ私のこの胸に落ちてこないものか。

「萩」

黙ッ、北の方から何かいぶくものが来る。

「女郎花」

あれは、氷雨のかげりでせう、

撥いてやる明さが、

もう私にはありはしない。

貧しく哀へたる身を思ふと、

あゝのろはしい、うらめしい、

とてものこと茶毘の薪にでならうかしら。

「萩」

近づいて来るのは風だ、

色も香もない老いさらばへた風。

「北風」

すゝき萩女郎花などに近づく、

若さの勢ひにまかせて、

螢の卵をすりつぶして行つた原、

あゝその草原にまたたどりついた。

女郎花よ、尾花薄よ、糸萩よ。
 年老いた巫女のやうに、
 ふけてしまつた晩秋だな。

小町

遠く野の果を杖にすがつて淋ぶしくうたひ
 ながら過ぎて行く。

いとせめて、戀しき時は、
 うばたまの、
 夜の衣をかへしてぞ着る。

愛しきを思ひつけ、

まどろめば、
 我を圓らかに抱く君が口づけ。

さびしやな、かなしきは、
 うたたねの、
 夢より外に逢ふよしもなく。

〔北風〕

おゝ、いま、わしの心をうつたかなしいうた、
 誰だ、たれだ、
 も一度くりかへしてくれないか。

——しばらく静寂——

萩

京より見えたるうましき女人の、
何故か、けふこのごろを、
うつらうつらとなくのです。

小野の里のうらぶれも、

私たちのほりも喜びも、

女人の笑みとともにうせたのです。

〔北風〕

あゝあれこそは名にしおふ、

賢美の歌人のなれの果か。

〔女郎花〕

うつつに流すそらなみだ、

九十九夜を男に通はせて、

戀ひこがれて死なれたら、

百年結ぶめをとよりなほもよろこべ、

ながらへてうつつに流すそらなみだ。

〔萩〕

風よ、女郎花よ、

かの女人は母の喪に、

燃ゆる戀心を押へてゐたのです。

かの女人は、一夜一夜を、
通ひ來る男よりも苦しみなやみ、
男の心のいや強き愛を待つてゐたのです。

〔薄〕

風よ、往け、

遠い町へ、山の遠なる京へ、
そこもお前を待つてゐやうぞ。

うばらも散らば、
とげばかりで淋しかる、
とげをも持たぬ身はなほさぶしい。

戀あるも戀なきも、
花さくも花のさかぬも、
みな枯れはつるさだめのいのち。

髪はほゝけ、衣はほゝけて、
さぶしいわたし、

さだめの前に泣くをやめやう。

風よ、去ね、

遠い都へ、をちなる町へ、

そこでもお前は悲しい歌をきくだらう。——幕——

四、關守小町

小田の苗代を見る繻の簾、

寂滅爲樂、降る雨に、

紫水晶の珠數はなく。

關守のひとりたつき、

かすかにけぶる緑の色、

あはれ身も光もほそり細る。

飛花落葉に修めし御法、

簫笛琴管を雨に聴く、

草庵の五月戀もなく、あゝ佛心の小町はかなし、

五、鸚鵡小町

尾花すゝきに心ゆるし、
 念佛一途老いの身へ、
 御勅使は眞如の月か、
 みいつくしみあやにかしこし。

雲の上はありし昔に變らねど、
 見し玉すだれの内やゆかしき、
 御製みづたおろがみ、御うたおろがみ、
 老いしれし鸚鵡はうたふ。

雲の上はありし昔にかはらねど、
 見したますだれの内ぞゆかしき。

六、卒塔婆小町

風よ、九十九髪きらめき吹けよ、
 一衣一鉢一杖、
 光つめて身はかるし。

三千世界にいきいくもの、
 皆成佛の經論の、

いかめしや、ありがたや。

得度佛心の身に、

卒塔婆は肌やはき櫻若木、

空渡る鳥は嘸迦か。

叡山の僧よ、しばらく許せ、

歩みつかれし老いこゝろ、

招きよせたるこの卒塔婆。

極樂は、

皺深き胸ぬちにこそ、

恐れもなく疑ひもなき身のかろさ。

七、清水小町

何として身のいたずらに、

かくもしらぐゝ老いたるぞ、

山ふかみ、

音羽の瀧の若々しさよ。

百千足國にうましくあれて、
 瑩ける玉はつけたれ、
 心たらはず、
 山姥の名に果てる悲しさ。

花降りくだる風の色、
 今も昔も音羽の瀧の若々しさよ、
 何として、
 我身のみかくばかりうつろひたるぞ。

阿佛尼

「おのづから傳へしあともあるものを
 神はしるらんしきしまのみち」
 北林の禪尼の記のうるはしさ。

旅枕かへしつゝ萩の筆すゝきの筆に、
 心こめたる十六夜を
 争ひの記とそしるは誰ぞ。

羨望嫉妬は蛇身の舞、
 榮譽は一時の花の夢、
 たゞ頼む彌陀の教。

紀の内侍への音信に
 輝く純理まこと、あふる愛、
 魔邪は去り、石もえまふ。

あゝ鎌倉の野は冷えて、
 病みほゞけ、露と果てたれ、

阿佛尼がまことは我等の心に生くよ。

常磐井局

はなやかなりしかの元祿の、
文化の跡を探ねるとき、
左衛門佐のいさをしをおもふ。

武斷の江戸は荒涼として、
花は咲き星きらめけど、
うたもなく詩もないあはただしさ。

彼女が移し植えたる詩歌の花は、
見よ、はなやかに伸びあがり、
大江戸の人を町を五彩に輝かせた。

思へ、彼女が將軍を前にして、
源氏を講じ古今を衍じたるさまの、
如何にすが／＼しく我等の胸をうつことぞ。

平安の文化に閨秀は星と光り、
元祿の文化に常磐井局はにほふ、

輝けき、ひらめけ、國土に咲く女性の文華よ。

税所敦子

『御垣下草』枯るる日なく、
我等の心にひかりかゞやく、
税所敦子の才筆を、
明治の紫式部とたゞえやう。

『心づくし』吾子に残せる、
薩摩下りの麗筆は、
十六夜の記にもまさり、

我等の心をふるはせる。

あゝ傳統と因襲とのまたどなか、
彼女の忍苦のうたを聴かう。

「あら磯の岩にあたりてくだけずば
波にも花はさかずぞあらし。」

まことや彼女の貞節の、
明月珠より嚴かなる輝きは、
見よ、かたくななる姑の、

答をも信頼の杖とかへた。

禁廷の忠誠は、
雲深くかじこき極み、
藩公に仕へし頃の至誠こそ、
彼女の生をさやかにかたる。

あゝ日本の女、税所敦子よ、
我等は御身の御名をたゝへ、
御身の婦徳と才能を

哀戀頌

93

幾久しくもまなぶであらう。」

小 督 (對話詩)

主の女房 (詞)

今宵ひとよさのお別とおもへば、
なみだあらたにわきながれて、
うつし世のつらきなさけの恨まれまする、
せめてお別のかたみ琴などおきかせ下さりませ。

小 督 (うた)

かなしきは入道がこゝろ、
君がみなさけきはみもなく、

夜毎日毎のむつびごと、
思ひ出よ、泪はふり散る。

あゝ南殿の月のよひ、
斗爲巾のしらべもすみて、
恩愛のうたもほがらに、
袞龍の御衣、ふかく抱かれしも今は夢。

(詞)

むらくもの入道が心の嵐吹きすさみ、
わらはを召し出して打たんのたくみ、

ほのかにもきこゑたれば、
君が御爲めも悪しかりなんと失せは失せたれ……

(うた)

かなしさ、さびしさ、女身の、
夜は夜としてしとねつめたく、
ひるは晝とて御詔もなくて、
たゞくるはしうこゝろみだるよ。

主の女房

(詞)

まことや恐ろしきは入道殿の心よな、
かばかりにうるはしき御局さまを、

たぐひなくいとほしき君が御心を、
無残や失せさせん悪企み、所詮厳しき天罰が……

小督 (詞)

さ、その天罰がいつの日に加へられやうやら……
いま飛ぶ天津鳥をも打ちおとし、
沈む陽をももどさんとする入道の榮、
かしこくも大君の邊をさへおかす大逆非道。

主の女房 (詞)

されど大逆の榮ゆるためしはござりませぬ。
榮枯のさだめ、盛衰の法、

いづれ入道殿のいまの榮も、
秋草のごと朽ち行くにちがひござりませぬ。

小督 (詞)

されば盛衰榮枯は世の定め、
いづれは入道の上にも來るではあらうなれど、
我が身の上に早うもめぐりこしこの衰へよ、
こても、人の世の常とは知れどあはれ悲しや。

(うた)

會者常離、無常の諸行、
月のひかりはかはらねど、

いぶせき嵯峨野露しげく、
思ひは遠く距ての柴折戸。

所詮この世にまたあふことの、
ねがひもかなし、いざさらば、
こよひ一夜も名残りにて、
明けなば行かん大原へ。

圓縮袈裟に身をかため、
十萬億利の土をおもひ、

九品の行業いそしみて、
華上の生命ひたにねがはん。

主の女房 (詞)

さては、明日大原の奥へこさるるは、
優婆夷とならん御こゝろでござりまするか、
おもへばからき世のなさけ、
人のいのちのはかなさがしみく、悲しうなりまする。

とても御かたいみこゝろを、
こよひの月の澄みようは、

ても、さつても心なや、

定めしおこゝろの痛まれますでござりませう。

(うた)

とめてとどまる水ならば、

しがらみかたく堰きとめて、

またあふ春を待ちませと、

ねがはうなれど甲斐もなや。

とめてとまらぬみこゝろを、

拜しまつればかなしみの、

とめどもなくて自らの、
心もみだれ身もみだる。

(詞)

おいたはしき御局さま、

こよひ一夜の月あかり、

明日よりは木魚うつ手に角爪つめはめて、

せめてお琴などおきかせ下さりませ。

小 督 (うた)

おゝ明日よりは、

木魚うつ手につめはめて、

この世の名残り斗爲巾の、
調べは蓮經誦讀しんきやうに益もなし。

いざさらば、世よ人よ、
指になれたる絃よ義甲よ、
こよひ一夜の別れうた、
こよひ一夜のわかれうた。

主の女房

おゝそのうたは『想夫戀』
月すむ夜さは鹿さへも、

つまこひまぎてなくといふを、
おお、おお、そのおんうたは『想夫戀』……

横 笛

一

詞「時頼どには、この頃いかどおはしまする。あまりに絶えし昔づれに、さてもこゝろのさぶしさよ。」
 ひるはひるとて夜は夜とて、
 君のなさけのわすられず、
 身細るおもひなにゆゑに、
 君はひさしく來まささる。

松の契りの色あせず、

あゝ蘭菊は枯れざるを、
 おもへば思へばそのかみの、
 灯赤き夜のなつかしや。

琴に向へど斗爲巾の、
 絃もなみだに見えわかず、
 今様の舞もみだれて、
 あゝ君の身のこひしやな。

かりそめの、たゞ徒いたづらの、

戀なりしとは思はねど、

さてもうらめしき君が心よ、

なにとて久しくは來まさざる。

詞『もしや、おんいたつきなどにも候らんか、はて氣にかゝる。』

翼をもたば翔けもゆかまし、

翼なき身の宮つかへ、

九重の雲たちこめて、

ゆくにゆかれぬかなしさは、

たゞあけくれをなやみなき、
こゝろひたすら憧れくるふ。

二

詞『わが君は姿をかへて、嵯峨の里、かくりすむとは無慙よ
な。何すれば戀することのかくも呪はれ、何故に愛することを
罪とはいふぞ。』

あゝちるはしきわが夫よ、

戀する事など呪はるや、

愛することのなにくまるぞ、

愛なくて人の生命の輝きが、

いづくにありと人はいふ。

不孝父母當墮惡道、

無量の劫もなんのその、
愛するものの道行きに、

針山焰釜おそれずと、

誓ひしことば今は夢か。

詞「夢ならばさめざらましを、夏の夜の、などかくばかり明
けやすく、わが戀、夢の、破れしか。」
せめての生命、

たずね行き、

君が法衣にいだかれん。

つもれるうらみ、

かきくどき、

君が心をよみがへさん。

三

月かげとともに内裏を出でたれど、
悲しきは心露草袖ひちて、
遠き嵯峨野や十市の里、

つかれし足のよろよると、
早くも夜は遠ぼえの、

犬の聲より更けて行く。

詞『法輪と申するは、このわたりにて候や、お佛のありがた
さに、はるく京より参りしもの、せめて一夜の通夜を許させ
たまへ。』

小僧ひなすのやさしき應いらへはありたれど、

たづぬる夫のすがたはなくて、

法燈のかけ、さゆれてくらく、

無情のなみだひたすらわくに、

思はず誦ずる經のりのふみ、
南無歸命頂禮虚空藏菩薩。

かくまでにこふる心を許しませ、

せめてこの世の横笛が、

この世もあらず吹きならず、

こゝろの奥の戀のうた、

たゞ一目、ただひとめこそ許しませ、

歸命頂禮虚空藏佛……。

詞『いまなるは、はや五更の鐘か、さても無常の鐘の音よ。
このまゝ空しく歸らんは、あまりにつらし、庵室はいづく、夫
はいづく。』

樓門は高く僧庵は廣く、
疲れし身にあてもなく、
しのび寄る竹戸さゝれて、
音もなきはかなさよ。

詞『三界唯一心、心外無別法、神佛及衆生、是三無差別……
…』あゝあれこそは華嚴經、おゝあれこそは、なつかしき時頼
殿の誦經の御聲。』

はしき妻よとのりたる聲に、
いまは暗ずる華嚴經。

千代かはらずちかひし口に、
いまは誦ずる提婆品。

詞『横笛こゝにたづね参り候。わがはしき夫、われ故に、姿
かへ候ことの、なか／＼にうらめしく、内裏のうちしぬび出で
て候。せめてもの願ひ、黒染の姿をなも拜させたまへ。』
戀しさなつかしさにふるふ聲、
かなしさうらめしさにおつるなみだ、

さだかにそれと知れたがら、
姿も見えずつらきことば。

『瀧口とは誰人ぞ、

人違ひにておはするか』とは、

そのかみの日のうまし床、

契りしきみのことばかや。

詞『あゝ今一度、墨染の姿を拜し、便りもあらば、自らも、
苔のたもとに裁ち替えて、共に後世をとこそねがひまつりて、
はるくくとさがし來れるこの身に候を……。』

あゝ秋草の赤き生いのちのはかなさよ。

いまはまた人もうらまず、

さらさらに世をもうらまず

いざさらば、

『山ふかみ思ひ入りぬる柴の戸の

眞の道に我をみちびけ。』

祇 王

『萌え出づるも枯るるも同じ野べの草、
何れか秋にあはであるべき。』

悲しさよ、舞になれたる手はふるへ、
苦しさを、あつき泪ははらほると、
自らの書く文字さへも、
しどろにみだれるうとましさよ。

はなやかなりし春の夢、
松ヶ枝の鶴の榮、巖の龜の壽と、
祈りねがへる戀さへも、
いまはあくたと捨てられて。

思ひ出はやぶれやぶれし舞の衣、
秋風はつらく冷めたく身をさして、
嘸迦もやがて冬の野に、
骨さらばへてはてるだらう。

いざさらば戀よ榮よ、
 いざさらば夢よ現よ、
 われは行く僧庵の観音座、
 南無佛哆咀哆薩嘛呵般若波羅……。

洞房花燭をすてて佛前燈に火をともさう、
 望天臺をくだつて鐘鼓樓に打ち登らう、
 あゝ羅絹の舞衣、芙蓉褥も、
 袈裟の軽さに着かへやう。

蓬萊の曲になれたるこの口に、
 いまこそは誦じて言はう孔雀經、
 蓮經七卷、南無佛陀……
 あゝ鐘がなる。鐘がなる。

久遠くおんの生命かゞやけと、
 精舎の鐘は我に鳴る。

佛御前 (散文詩)

(悔恨のくもりを怖れつゝ、しきりに地に墮つる花を、拾ひあつめてゐる私に、その人は靜かに語りつゞける。)

七珍をちりばめた香爐より、怪しく立ちこむるいぶき。恩籠の手枕をそらして、ひそかに花房をよろめき出た佛は、外廊の朱柱に身をよせて、顛顛に指をあてたまゝ、しばらく茫然としてゐるのであつた。

金無垢の新月の耻しさ。没藥の炷きこめたる宵牀の、ぬくも

りも去りやらぬ彼女の肉體は、かすかなる痺撃を、障子にうつしてゐた。たよりなげなる溜息。悔恨のふるへ。彼女の紫の唇は、をのき乍らひらかれた。

『焰火満ち充つ七寶の舍中に、囚となつた女人の、まことの告白を、今こそしみじみと聽いてくれるものはないか。』と、

微妙なるいぶきに、秋を淋しく生き活くる萩は、黙して俯向き、幽玄なる上天の衆星は、憊れた佛の顔をだまつて凝視した愛の闖入者よ。戀の篡奪者よと、彼女をのしるものはあつても、貪婪の暴君よ。呪はしい権力よと入道に背くものはない

殿中である。

『善智なる祇王は、證を永劫の彼方に仰いで、遙に去つた。愚なる私は、狂ふ慾焰のなかに迷ひつゝ、舞ひ、謡ひつゞけてゐるのだ。』

花蠟はいつか庭先に投げ捨てられ、丈長き髪は佛の想を、よろこばしい心の目晴めを、靜かに包みいたはつてゐた。

空蟬のうた、胡蝶の舞も、哀れ一炊の夢。王侯の名貴く、顔華麗はしくとも、やがて榮樂の上に秋風は吹き荒む。

(萌え出づるも枯るるも同じ野邊の草いづれか秋にあはであるべき。祇王のうたの垂教に心とめよと、その人は語りつゞけた。)

戀と惱みとより知らなかつたましろい掌に、清冽な金髓に曝らした胸を抱きしめて、おもてをあげた佛の眼は、かぎりなく美しい光をとらへてゐた。

『歩かう。凡百の夢は醒めた。新なる曙の野末へ！身も軽く心も爽に、のびのびと自分の實在を眺めやう。』

佛は哀しみから逃れた幸を、素々と微笑んだ。重苦しい錦繡眩暈の花房燈。今は一切を捨てた彼女に、何のかゝはりもなか

つた。唇も、息も、精魂も、月光の中にとけいつて、彼女は足取りさへも豊に、露しげき秋の野路を歩みつゞけた。新なる曙の光をさして……

（佛とは彼女一人の名ではないのです。世のすべてのさめたる女。私はさういひ乍ら、その人の日やけた腕に、俯伏して熱い涙になきくれた。）

勾当内侍

ののしりの霰礫よ、

呪ひの火矢よ、

私も喜んでそれにうたれやう。

香なき泥ひぢをも紅に輝かせ、

不死鳥のごとうたひながら、

戀に焦れる心臓をも裂かせやう。

刑罰を超えて中將に、
 うるはしき魂を捧げたる、
 勾當内侍の高き愛よ。

血ぬられたる戦場の、
 草は枯れ武勇の物語はつきても、
 戀の旗よ、はためけ、ひるがへれ。

鋭き火矢よ、礫^{はらきせ}背よ、
 のしりの霰^{つよて}礫よ、

されど愛のみはとほに生き活く。

建禮門院

勸行の鐘うつ手、しばしやすめて思ひ入れば、
 殘燈の影、かそけく袈裟の袖にゆれ、
 郭公鳥、たちばなの香をとめて啼く。

あはれ、殿上の桃李の夢よ、芙蓉のうたよ、
 世にもつれなき盛衰のさだめに、
 西にのがれて、波の上。

船は揺れ、船はもまれて、
 惜しからぬ生命、甲斐なくも救はれ、
 いま、朽屋のうちにわびしき祈り。

かたみの御直衣、布施の旗の、
 なほ、移り香の高ければ、
 まどろむ間なく、しのばるる。

ほととぎす、ほととぎす、血を吐きて、
 死する身に幸こそあれや、長らへて、

人を戀ふ身のかなしさよ。

時忠が女

母を失ひ、父と別れし淋しき子は、
たゞ君のみを力とたのんでゐるのです。

二位殿と仲たがひして追はれ行く、
いたましき御身の運命に、
遠の野邊、越の山邊も相具して、
ゆかんとねがふ私です。

一夜の契も永遠の誓ひ、
妻はひたすらひたすらに、
よき半身を願ふばかり、
何故、かくばかり音信は遠きぞ。

野邊山邊、草は枯れ、風よすさめ、
天が下、かくり家なくも、
君よ、二人の生命の榮は
須彌山の遠にこそあれ。

落ち行かんに、逃がれ行かんに、ともひ給へ、
君よ、御身のためにすべてを捧げた私です。

小宰相局

幸あれと、祈りし甲斐も海あれて、
はしき夫のうたれしと聞くぞ悲しき。

思へばむかし女院の御めぐみに、
心に架けし戀のまことの丸木橋、
かくも早く潰え墜つとは、
あはれ情なき谷川の増水よ。

三年が間の 船のやどりの起きふしに、
たゞならぬ身とはなりたれど、
今ははや、君もなき一人世に、
ながらへん事の悲しさよ。

鬘伽を結ばんにはつかれしこの身、
墨染の衣も我に今はおもく、
ながらへば、ながらへば、悲しみの、
たゆる日もなく我が身をめぐる。

月の落つる遠のをちぞ、
 水の光るわだつみの底の底ぞ、
 わがよろこびの淨き土、
 わが夫のひとり淋しく待ちてぞまさん。

南無、大慈大悲の阿彌陀佛、
 いまこそ、われは行く。我は行く。

静

梶原がのろひの讒にあひ、
 遠く落ちたるよき夫の、
 こゝろのあかりたてんとはすれど、
 冷めたき風は吹きすさむ。

いまは悲しきうたがひの、
 とりことなれば明日の日を、
 淵ゆく水のうたかたと、

行方もわかず消えもゆく身。

賤やしず、しずの緒田巻くりかへし、

昔を今にするよしも、

あはれかなしき祈りなら、

いのちも今は何しよう。

いとせめて君がまぼろしかいだきて、

舞ひてぞはてやう、羽衣よ、

獅子團亂とらでん旋よ、寶萊よ、

ころはあかあかと君にい活く。

源乙姫

乙姫のかの美しき愛の死を、
誰かなみだなしに語り得やうぞ。

清水冠者の討たれし事のきこえし日より、
世をのろひ人をのろうて、
食もとらず惱ましくなき入つた、
彼女の汚れなき尊き愛よ。

百燈百味、神樂御湯、
さては醫師の朱砂丸も、
彼女の哀愁をいやさんには、
あまりにも悲しい療法ではなかつたか。
夫をこがれてはてたる乙姫の、
いたはしいその臨終よ、
少女の愛の純なる輝きよ、
彼女もまた麗はしの日本の女性。

あゝ乙姫の美しき戀の死を
誰か泪なしに語り得やうぞ。

重保が妻

石切山のいただきに立つて、
由比ヶ濱を靜かに眺めやう、
美しく輝く白砂青浪の、
それよりも優れて輝くものは、
かの重保が妻の愛ではないか。
夫の討たるるを眺め見おろし、
悲しみの極み自らほふつて、

蓮生の榮を願つた彼女の、
その情熱のかしこさは、
望夫石の朽つる日なく明燿する。

見よ、野菊の薫するあたり、
彼女の心は嚴かに輝き、
尾花の袖ふるあたり、
彼女の姿はにこやかに笑みかける
生命賭けて人を戀へと。

さらば私の心の愛戀も、
石となれ鬼となれ、
苔むす日まで、
常暗の夜も、
輝き生くる石となれ鬼となれ。

烈

婦

唱

二位禪尼

杳なるひかり、
額に落ち、こゝろにとまる、
ああ淋しき海つらよ、
くろくとうねりてやます。

ここは二位の禪尼、
珊瑚の宮のまぼろしに、
安けく聖く、

主をうつしたるかなしき海。

いまははやこの世ひとつの、
宮居の舟も血ぬられて、
せんすべもない悲しさに、
久遠の宮居もとめしところ。

いまもなほ海はうたふ、

悲しききはみの禪尼の歌よ。

『今ぞしる御裳濯河の流には』

浪の下にも都ありとは』

あゝ沓なるひかりよ、

段の浦海、くろくとうねりうねりて、
かはく日なく、とはに、
哀樂の人の子は涙なく。

玉蟲前

射損んじなば平家の勝の、
 いくさうらなひの扇の的、
 かなしくも射おとされ、
 うたにかくして笑ひはしつれ、
 玉蟲がこゝろのふるへ。

時ならぬ花や紅葉のちりぢりに、
 やがては消えん運命か、

芳野初瀬の榮の夢も、
 さめて冷めたき波の枕、
 玉蟲がこゝろのふるへ。

いまさらに占たての悔いられて、
 沈む夕陽のあはきひかり、
 柳五重の袖の上、
 涙しぶき降りもやすまず、
 玉蟲がこゝろのふるへ。

袈裟御前

いけにえを捧げたる幻の祭壇に、
不滅の光明はあか／＼と我等をてらし、
不朽の黙示はしらく／＼と我等をめぐる。

自ら屠つて何故貞節を固守しなかつたか、
盛遠の首打ちとつて何故正しくは生きなかつたか、
人々よ、今さら袈裟を責めるをやめやう。

母が命をたすけんために、
心ならずも操をすてたその誤れる孝養を、
袈裟一人の罪に歸するはむごたらしい。

あゝ呪はしい権力よ、三従七去の信仰に、
どんなにも多くの婦人が空しく殺された事だらう、
あはれ袈裟もそのひとりではなかつたか。

されど見よ、自らを母の命の前にさゝげ、
死をもつて恐ろしき罪をあがなつた、

彼女か悲しくも壯しきその最後を。

まこと悔恨はすべてを許し、死はすべてを淨める、
袈裟よ、今の世にもなほしはしは見る悲しき袈裟よ、
私はそれ等あはれなるいけにえの前に涙こめて香を焚く。

微妙

舞のそでへんぼんとひるがへし、
論はなごやかにすみたれど、
父をまぎ行くつれなさに、
涙なきたる微妙はかなし。

片岡にふせる旅人あはれいま、
たづぬる里に宿もなく、
逢坂の關をへだてて東の、

鎌倉山のしぐれつめたく。

泪にぬれて干ぬ袖の、
いつか晴間を見んものと、
祈りし甲斐もなかなかに、
はてしときける悲しさよ。

いまははや戀もすて怨もすてて、
望みなき世のながらへを、
せめて後生をいのらむと、

舞衣にかへし袈裟ころも。

そでの軽さは變らねど、
こゝろせつなく壽福寺の、
淋しき庵にさめざめと、
なきてはてたる微妙はさびし。

巴御前

友よ、オレルアンの少女をたゞえる前に、
私たちは先づ關寺の巴の勇を讃へようぞ。

袖つけたる腹巻の萌黄の絨、

連錢葦毛の駒はいさみて、

ふりほどきたる黒髪のながくなかく、

荒武者の首かききつて、

主將の敗戦になみだなき、

その死後までもつかへんと、

願ひもとめし心根の、

いまもなほ私たちの心を打つではないか。

友よ、日本のジャンダーク巴の名をたゞへよう。
かの關寺のいさましきいさほしを。

北條政子

鎌倉の夕、また晨、

私の思慕は政子の上に燃えさかる。

何時の日に立つべしとも知れぬ敗残の武士に、

たゞ信頼の祭壇高く捧げたる、

彼女の愛よ熱情よ、

あゝ貴くかしこき彼女の忍苦の生命よ。

鎌倉の荒野に興されたる源家の、

勇ましき旗のなびきの許、

誰か彼女の采配の力の、

偉大なりしを認めぬものがあらうぞ。

華やかに彩られし、

鎌倉文化の光のなか、

誰か彼女のすぐれたる才能を、

讃ふる事をとがめ得やうぞ。

小なる醜惡はしばらく許さう、
彼女の持つ泪の純情は、
それ等を償ふに充分ではなかつたか、
あゝ眞實、偉いなりし女よ。

古鎌倉の面影は日々にうすれ、
昨日も今日も心なき人は行き人は去るに、
彼女の垂教の貴さは、
我等の上に不滅の光をなげかける。

鎌倉の夕、また晨、
私の思慕は政子の上に炎えさかる。

乃木静子

『出でましてかへります日になしときく、

けふの御幸に逢ふぞかなしき』

山村の校庭にまだ十歳の少女の私はないた。

老教師のなみだに語つた乃木夫人の最後のうたよ。

あはれ月かはり歳はゆいて、

山家をいでて十餘歳、

なほほがらかに耳をうち、嚴に心うつは、

彼女の稀有に高きいさほしである。

皇國の歴史に忠臣多く、

忠に死したるものはあれど、

死せざるを得るに死して、

忠をなしたる未曾有の乃木夫妻よ。

永遠に輝く生命よ生くる誠よ。

千木高々と空に聳え、

礎石深々と地を貫きて、

慈
母
讚

168

あゝ我等、彼女を祭り將軍を祀る。

鬮髀の尼 (詩劇)

序

むかし天竺の提婆提女は、
その一人女の死を悲しみ、
その身を干しかためて、
頸にかゝげてありしと傳ふ。

我が朝の成範が娘は、
無暴なる北條のため、